

ほつかいどう NIE 通信



発行 北海道 NIE 推進協議会

ま長生7 当たはおた欄い のの讀在はめ 環手D

D（持続可能な社会の担い手を育む教育）活動の一環。「その日の記事をその私は後志管内京極町生まれ、この2月10日で101歳になりました。農家をやめ荒物屋を始めた父親は日がな一日、小樽新聞現在の北海道新聞）を隅々まで読んでいるような人で子供のころから当たり前に新聞の風景がありました。

確かに小学6年だったと思います。「物は付け」という欄があるて、賞金50銭をいたいたことがあります。お題は「声をかけたいものは?」私がはがきに書いた答えは「向こうを通る勘当した子供」でした。

札幌師範学校を終え昭和7年（1932年）に教員生活がスタートしますが校長時代に苦い思い出があります。昭和36年（61年）の

当日発行の新聞記事で学習指導案を作成する、一昨年11月に始まつた北海道十勝新聞教育研究会（会長・陰元正二芽室町立上美生小校長、約60人）の月例学習会が着実な成果を上げている。「速報性」など新聞の持つ特徴を生かせる教師の力量アップが狙い。NIEアドバイザーで帯広市立西陵中の野上泰宏教頭は「新鮮な指導案は子どもたちを引きつけ、新聞活用の幅が一気に広がる」と効用をアピールする。

対。当日は動員された組合員らが校内に陣取つて騒然としており、テストを行うような雰囲気ではありません。テスト用紙を持参した町教委職員は、校長である私が用紙を手渡すこともなく帰つてしまします。結局



新聞は信頼すべき情報

元小中學校長 前田克己

決まつたのは11
の1年前のこと
提訴を取り下げ
うにしない」と
ありましたが、
間が廃ると思い
ぱりました。

若いころは読者欄にちょくちょく投稿し、それが紙面に載ると、とても励みになったものです。校長になつたからは朝礼のあいさつで、タネに新聞が欠かせませんでした。また子供にとつ

私は根っからの新聞大好き人間です。昔の教員にとってNIEというのは想像だにできない活動だったのです。今、教壇に立つていたら必ず新聞を活用した授業をしていました。日々紙面を飾る世の中のさまざまな出来事は、「土台」のある記者によつて書かれた信頼すべき情報なのです。後輩たちが存分に新聞を活用してくれることを強く望んでいます。

私は後志管内京極町生ま
れ、この2月10日で101歳になりました。農家をやめ荒物屋を始めた父親は日がな一日、小樽新聞（現在の北海道新聞）を隅々まで読んでいるような人で子供のころから当たり前に新聞

「学力テスト事件」です。

当時の文部省は道内の実施校として小学校70校を抽出。この中に京極町脇方小も含まれていました。

北教組は教育への国家支配強化などを理由に猛反

D 同研究会が掲げるE S
（持続可能な社会の担い手を育む教育）活動の一環。「その日の記事をそのままの形で、他の人に提供できる」というの

第三回 曙日の午後7時から1時間、奇数月に北海道新聞帶広支社、偶数月には十勝毎日新聞社でそれぞれ開催している。

まず15分間、新聞を闇読。参加教員がそれぞれ考えた指導案の概要を口答で発表し合った後、最も優れた1点を、合議の上で指導案として固めていく。

この時点では校種も教科も決まっていないが、さらにも議論を進め「まかせてね

5人が参加した昨年10月の学習会では、首都圏で活動している十勝出身者の記事から中学の特別活動（進路）用の「こんな仕事をしてみたい」の指導案を作成した。1時間で記事閲読、各自の感想や考えを述べた後、もう1時間を使って希望する職業に就くために必要な進学先や資格をはじめとする具体的な調べ学習を指導するという内容。毎回欠かさず参加している帯広市立川西中の羽田尚史教諭は「指導方法を吸収して、新聞を使つた授業の力をつけたい」と話していた。

月例学習会 効果アップ

十勝新聞教育研
新鮮な記事 指導案に

今日の食事」（小学6年家庭科）や「行書で書こう」（中学2年国語書写）といつた各月ごとのタイトルを決め、正式な指導案に仕上げる。また会員以外の教諭が

にも活用してもらうため、インターネット上の無料サイトで、この指導案を共有している。

本年度 全日程が終了

2地区でセミナー

当協議会主催の第13回旭川(12月6日・旭川市立永山小)と第12回帯広・十勝(2月8日・十勝毎日新聞社)の地区セミナーがそれぞれ開かれ、公開授業や実践発表などを行った。セミナーはこれで本年度予定していた9カ所の全日程を終了した。

大武教諭は、拡大コピーされた被災者の救出に当たる特殊救助隊員らの写真一枚を見せた後、島から避難した人、島に残った人のコメントなどが載った記事を紹介し、「自分ならどうつちを選ぶ」と問い合わせた。

児童の反応はさまざま。島の様子を報道した新聞を教材に使つた。

中には「島の中にも安全な場所がある。そこに避難して大好きな島で、家族といつしょに自分の命を守りたい」と答えた子も。

セミナーでは前任校(旭川商業高)で、新聞製作の指導に当たり、全道高校新聞コンクールで4回にわたって総合賞に導いたことのある旭川工業高の岸美千代

教諭のほか、江丹別小の沢渡敬子、永山南中の辻秀博

両教諭がそれぞれ実践発表を行つた。

ソチ五輪で指導案作成

● 帯 広

だ班は、授業の狙いを「強い意志」とし、展開の流れの中で、「自分にとつて一番を目指しているもの何か」、さらに「自分はどんな努力をすれば目指している一番になれるのか」を考えさせることにまとめた。

新聞写真で 生命の尊重

● 旭 川

上川管内の教育関係者を中心約35人が参加。はじ

めに永山小の大武敦史教諭が担任する3年2組の児童33人と「生命の尊重」をテーマに道徳の公開授業に臨んだ。

昨年10月の台風によって甚大な被害を受けた伊豆大島の様子を報道した新聞を教材に使つた。



拡大コピーした写真を見せて伊豆大島の被災状況などを説明する大武教諭

十勝管内の教員ら参加した約40人が、5班に分かれ道徳の授業に使えそうな教材を十勝毎日新聞と北海道新聞から選び、指導案を作成して取り組んだ。

ソチ冬季五輪で日本選手団主将を務めた葛西紀明選手の記事「最多出場(7度目)」誇りに懸けて」を選ん

NIE実践奮闘記

支笏洞爺国立公園内に位置する洞爺高校は、全

校生徒50名足らずの小さな町立高校である。家庭科を大学科とする「生活ビジネス科」の単置校であり、専門学科の特色を生かしたさまざまな実践活動に取り組んでいる。

特に、2008年度か

ら開始したECOプロジェクトは、地域で生産された農産物を材料とした製菓の開発・製造・販売を通じて、地域の方々に環境保全への関心を高めていた。だと同時に、生徒のコミュニケーション能力を高める活動とし

て、本校の教育活動の柱となつている。このECOプロジェクト活動において、古新聞を使つた「新聞エコバッグ」製作の取り組みが始ま

袋を使用しないことで二酸化炭素の排出を抑えるなど、環境にやさしい生活を提案したいと考えたのである。

さらに国語科・地歴公

民科と連携し、1学年で

聞いて、家庭科を中心にして、家庭科を中心にNIE活動に取り組み始めた。

3年間を通じてあらゆる方向から新聞にかかることによって、生徒たちはより気軽に新聞に目を通すことができるようになつていて。

また、1学年では新聞記事を探すことさえできずにいた生

徒が、3年生になると後輩へ新聞記事の選択の仕

教科間連携しながらの活動として、本校のNIE活動は進められている。

3年間を通じてあらゆる方向から新聞にかかることによって、生徒たちはより気軽に新聞に目を通すことができるようになつていて。

「高校生と新聞の関わり」この後、上士幌小(上士幌町)の平野美幸教諭、鹿追中(鹿追町)の近藤弘樹教諭、帯広農業高の田中美佐枝教諭の3人が実践報告を行つた。



狩野 千賀子



洞爺高校教諭

まつた。

商品をお買い上げくださいました。

さつた方に使用していました。だく袋を新聞エコバッグにすることによって、古紙の再利用の促進、レジ

子であった。そこで、新

学年進行で記事を考察

活用し、広告・宣伝活動も同時にを行うこととしました。しかし、本校生徒は新聞を読む習慣がないため、新聞から地元のPRにつながる記事を選択することによって、古子であつた。そこで、新

年で紙面構成と見出しや写真から記事の内容を推察する能力を高め(国語科)、3学年では自由に記事を選択して考察を行なうようになつてい

ます。また、1学年では新聞記事を探すこと

さえできずにいた生

徒が、3年生になると後輩へ新聞記事の選択の仕



新聞活用の授業 多彩に

根室・北斗小

北斗小は本年度のNIE新規実践校に指定され、教壇に立つて4年目という程野教諭が実践代表者になつた。

学習の成果 投稿に挑戦

活動の事始めは記事の切り抜きと感想の発表。昨年4月から自宅で購読している新聞を程野教諭が持ち寄り、日直の児童にその日一番気になつた記事を選ばせ、帰りの会で感想を発表させる試みだ。「例えばテツチャン（鉄道マニア）の子はJR関係の記事選んできた。得意分野、興味のある記事から新聞に親しんでほしいと思つたんですね」と話す。

並行して道新で流れ、道央のほか旭川市や士

北海道NIE研究会（今長・豊島義明札幌市立定山渓中校長）主催の実践交換会「冬季研修会」が1月7日、北海道新聞本社で開か

さを全校児童に広めよう」という授業を行つた。4年生以下の後輩たちに、新聞の長所をアピールするための新聞づくり学習。児童一人一人が一般紙の中から伝えたい記事を抽出し、情熱

習も併用した。高井凜久君は「かつこ悪くても弱い人たちを助けた。いみんなのやなせさん死去」という長い見出しの新聞づくりに打ち込んだ。素材にしたのは10月13日に死

ついて指摘する。
その上で「朝刊のニュースをさかにに、子どもたちと会話のやりとりもできる楽しい道具。新聞にはいろんな効用がある」と話し、童顔をほころばせた。

新聞を違和感なく受け入れられる子にー。北海道の東端、
北方領土が指呼の間にある根室市立北斗小の程野純貴教諭
(27)はこの1年間、バラエティー豊かなNIE活動を実践して
きた。担任する6年1組の児童39人を相手に記事の切り抜
きと感想の発表、新聞社への投稿、インターネットを活用した
新聞づくりなど手を変え品を変えて新聞という素材そのもの
を理解させる指導に当たった。「効果は大きかったと思う」。
漠然とではあるが新聞活用の手応えを感じ取っている。

書く練習を経た後、投稿欄「みらい君の広場」（北海道新聞）にも挑戦。斎藤澄昌さんと佐藤美柚さんの作品が採用された。

また、7紙の配達が始まった9月からは校内に「謡んで見て♪新聞コーナー」を設け、児童が気軽に新聞が読める環境を整える一方、読ませたい記事を切り抜いて掲示した。

10月には、「新聞の面白



校内に設けられた「読
で見て♪新聞コーナー」

去したやなせたかしさん（漫画家）の特集記事。「アンパンマンのことを分かりやすく知らせたい」と工夫を凝らした。

例に挙げ「活用次第によつては教科書に出でていなひ

【今】も足尾銅山鉱毒事件といった「昔」も教えることができる」と、新聞の持つ教材としての有用性について指摘する。

高井凜久君は「かつて悪くても弱い人たちを助けたみんなのやなせさん死去」という長い見出しの新規づくりに丁ち入んだ。素の上で「朝刊のニュー
スをさかに、子どもたちと会話のやりとりができる楽しい道具。新聞にはいろ
んな効用がある」と話す。

童顔をほころばせた。

道支社の西川祥一報道センター長が講演Ⅱ写真Ⅱ。リクルート事件など印象に残った取材を振り返った後、「北海道を支えてきた交通や電力、一次産業などの星分で聞かを立てる力もつゝ、年1組の児童たちが取り組んだ新聞スクラップなどについて発表。「(新聞の)見出しが子どもたちの『言葉』になり、それに合わせて自分で問合せて自ら学ぶ力もついてきた」と語った。

道NIE研究会が研修会

高校1年

る。引き続きウオツチして
いきたい」と述べた。

社会)を担当する中村教諭は、メニュー表記に厳格な

続いて、NIE実践指定

法規制のない現状を詳しく

校の札幌市立北園小の吉野
令欧奈教諭と、札幌光星中
学高校の中村大輔教諭の2

報道した記事と、読者投稿欄の「食品偽装、消費者も情報吟味を」の記事を使つ

人が実践報告した。

た食品表示問題の授業について報告した。

道内高校新聞

8

ナウ

達夫さん。コラムは「三行独語」「北海寸言」を経て、49年に「北海独語」に改題され、以後は新聞の顔として読まれている。新聞局長の阿部創君(2年)は、創刊から66年の歳月を刻んだ伝統を誇らしく思っている半面、素直に「伝統を守つていく責任、プレッシャーみたいなもの

4月下旬から編集・企画会議に取りかかる。編集の柱は大きく二つ。一つは運動系・文化系を問わない部活の紹介だ。硬式・軟式野球、サッカー、硬式・軟式野球、サッカー、

柔道、新体操、陸上、剣道、アイスホッケー、弁論、吹奏楽、美術、将棋」など。アラカジメ担当を決めて予選から取材に当たるのだが、どの部活も道内屈指の実力校だけに、場合によつては全国の大舞台まで追いかけて記事化している。

最新の182号(昨年7月発行)では、伝統の硬式野球部が札幌地区で32年ぶりに初戦敗退した戦評を丁寧に伝えるとともに、3年生選手のコメントも集め、見出し「夢は後輩たちへ」

元にして紙面化した。「戦争と北海」の取材班に入った富宅沙也加さんは(1年)は、ヘイトスピーチ(憎悪表現)を主題に「戦争を美化し、相手を卑しめる発言をすることで、何が変わるのだろうか」と問題提起した。

新聞局は、ほかにタブロイド判2/8ペーパーの新聞も

1885年(明治18年)設立の北海英語学校の流れを引き継ぐ私立男子校の旧制北海中学は、戦後の学制改革に伴い1948年に北海高校として再出発する。この年の12月、道内の高校新聞の先駆けを担うことになる「北海高校新聞」が誕生したが、1面コラム「創刊寸言」の筆がすこぶる熱い。



勢ぞろいした北海高校新聞局の局員。手前左端が顧問の大内教諭

編集後記

○…小学1年の晩秋だったから、もう50年前の事になる。一つ上の姉と買い物にやらされ、支払う段になって千円札の紛失に気づいた。父親は出稼ぎで不在。家で待っていた母親に叱責され、懐中電灯を頼りに草わらにも入ってお金を搜したが見つかるわけがない。中学校の男先生が通りかかったのは、そんな折りだったと記憶している。

○…日本海沿岸の寒村、学校も小中併置だったので、先生はわれわれ姉弟の名前も家の事情も熟知していた。事の顛末を話すと、胸ポケットからおもむろに財布を取り出し「母さんには『もらった』と言ったらダメだぞ」と念を押して千円札をくれた。地獄に仏の思いだったが、子どものつくうそだ。すぐにばれ、かえって母親に叱られた。

○…年が明けた卒業式。中学3年の担任だった先生が、おえつしながら20人ほどいた教え子の名前を読み上げた。進学する生徒はほんの一握り。道外の紡績工場を含め大半が親元を離れ15歳で社会人になるのだ。「教え子が不憫だったんだろうなあ」。卒業シーズンになると思い出し、そのたびに先生の心根をしのび頭を熱くしてしまう。こんな先生と出会えた幸せをかみしめながら。

(葛)

運動・文化の活躍丹念に

という読み応えのある記事としてまとめた。もう一つは海外を含めた社会全般や歴史問題などに

新聞局は、ほかにタブロイド判2/8ペーパーの新聞も年間4、5回のペースで出しているが、OBからの引き合いが多いため、全校生徒(約1200人)を上回る1500部前後を発行

全道高校新聞コンクールでは、年々参加校が減っている写植部門の常連。過去10年間で4度、最高位の総合賞を射止めている。昨年も8月には総合文化祭長崎大会にも参加した。これまでの新聞発行は184回。2005年には創立120周年記念事業の一環で、高校新聞では珍しい縮刷版が発刊されている。

メモ